

## ■はじめに

「もし、地球が東から西に自転していたとしたら、世界は、現状とどのように異なっていたと考えられるか、いくつかの観点から考察せよ」という、2014 年に出題された東京大学理科 1 類の小論文の問題を例に出して、大学の入試問題が変わることについて話をしたことがありました。このように、繰り返し「高大連携」を含めて「大学入試が変わる」と話をしてきましたが、2020 年がまさに迫ってきているという実感をもっていただきたいと思います。



今日は、大学入試ではありませんが、大学を卒業したその先にある社会の例として、ある会社の採用試験を紹介したいと思います。（下図のとおり）

**課題A**  
2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定です。  
社会・経済にはどのような変化があり、どんな問題が起こるでしょうか？  
その問題を解決するために何をすべきか、次の設問にそって回答してください。

【1】前回の東京オリンピック・パラリンピックが社会・経済に与えた影響について説明してください。  
【2】今回の東京オリンピック・パラリンピックによって、社会・経済にはどのような変化がおこるでしょうか。任意の3つのテーマについて予想し、理由とともに説明してください。  
【3】【2】によって起こる問題とその解決法を考えてください。

この他にも、「課題 B」、「課題 C」とあり、その中から一つ選択して応募できるのですが、この「課題 A」については、「A4 サイズで提出。ボリュームは自由。手書きでも PC 作成でも構わないので印刷して提出。」と事前に Web 上で公表されていました。

この採用試験を出している会社はテレビでもおなじみの『ライフネット生命』です。

## ■「自分の頭で考える」人材が求められている

ライフネット生命が募集している新卒の定義は「30 歳未満」です。ということは、大学や大学院を卒業する 20 代前半の若者だけではなく、大学や大学院を出てから社会や世界の中で様々な経験を積んだ若者も「新卒」として捉えています。この「新卒」の捉え方ひとつにも、この会社がどんな人材を求めているのかということが読み取れます。採用マニフェストに「進化を続ける」といった内容を盛り込んでいますので、例えば 28 歳、29 歳で挑戦する人に対しては、大学卒業後何をしてきたのか、どのようなことに関心をもち、打ち込んできたのか、といった受験者自身の「パッション」や「ビジョン」を問うている、ともいえるでしょう。

「課題 A」については、『数字・ファクト・ロジックを使って、自分の頭で考える課題 A』と前置きがついています。ここでも、求める人材像が明白です。借り物の知識でなく「自分の頭で考える」人。その考える基盤となるものは感情や経験といった非論理的なものではな

く『数字』と『ファクト（事実）』と『ロジック（論理）』であるということ。つまり、「数字」と「事実」を使って「論理」的に自分の頭で考え、社会の課題を解決する最適解を導き出す。そういった人材を求めているのです。



### ■「人・本・旅」から人は情報を蓄積する

ライフネット生命の創業者は、出口治明氏です。出口氏は、大学卒業後、日本生命に34年間勤めた後、2008年にライフネット生命を起業しました。その後、全国でも例を見ない「公募学長」というプロセスを経て、立命館アジア太平洋大学（APU）の学長に選ばれ、2018年に第4代学長として就任しました。60歳で新しい会社を設立し、69歳で大学の学長に公募で選ばれる。まさに、出口氏自身が「進化し続ける」人だと思います。

立命館アジア太平洋大学（APU）は、2000年4月に設立された日本初の本格的な国際大学です。創立20年に満たない大学ですが、今では、西日本の私立大学で「No.1」、全国私大において5位の人気大学となっています。最大の特徴は、ダイバーシティでありグローバルな環境だといえるでしょう。約6,000名の学生の半数が世界88カ国からの留学生であり、教員の半数も外国の方であるといいます。授業も、一つの講義を英語・日本語の二通りで開講しているというように、まさに、多文化・多言語のキャンパスです。これまで紹介してきたAIU（国際教養大学）やミネルバ大学のような未来に目を向け、世界に開かれた国際的な大学と言えるのではないのでしょうか。

今年の4月、出口氏は学長として卒業生への講演の中で、「学んだことを生かして、自ら行動、チャレンジして世界を変える人になってください」と話し、「知識を蓄えるだけではなく、自分で考える癖をつけなければならない。そのためには、たくさんの考えや発想する人に学び、その人たちの発想を真似すればいい。」と、エールを送りました。このことは、学校教育において、「どのような子どもを育てるか」「子どもにどのような力をつけるか」ということを考えるときに参考になるのではないかと考えます。

「自分の頭で考える」ためにはどうしたらよいのか。出口氏は次のように語っています。

問題を原点から見据えて、ラディカルに解決策を導くためには、思索するための材料となる情報のインプットが必要です。では、人はどのようにして情報をインプットするのでしょうか。それは間違いなく「人・本・旅」です。たくさんの人に会い、たくさん本を読む、いろいろな現場に出掛けて体験を重ねることで、人は情報を蓄積するのです。

出口治明著「本物の思考力」小学館新書 2017年

人それぞれ、情報を得る方法は様々でしょうが、「人・本・旅」の中で、今日は、「本」に注目したいと思います。「本」は、「人」や「旅」と違って時間やお金もあまりかかりませんし、何より、時間や空間を越えて様々なことを学ぶことができます。

振り返ると、私たちも、読書の大切さについては十分認識しています。ただ、「大事だ」と十分に認識しているけれども、日々の忙しさの中で手が回らないという現状があるのではないのでしょうか。

## ■学力と読書活動

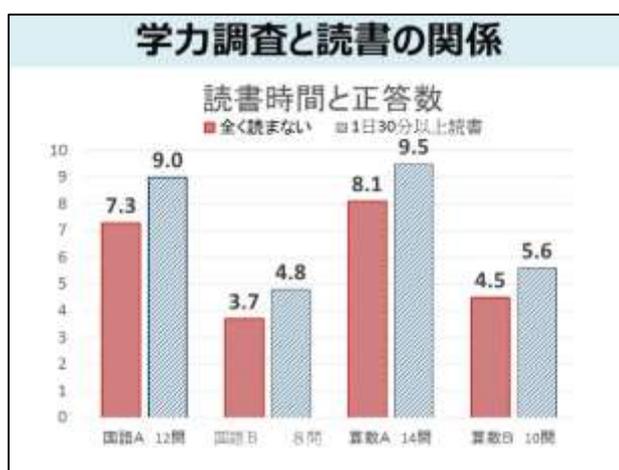
この読書については、ベネッセ教育総合研究所から、興味深い調査結果が発表されました。小学生の読書に関する実態調査・研究で、電子書籍の読書履歴と学力テストをひもづけ、次のように分析しています。

- ・ 読書量が多い子どもほど学力が向上している。
- ・ その影響は特に「算数」で見られる。
- ・ 学力が低い子ども（学力下位者）にプラスの効果が大きい。

ベネッセ総合教育研究所「小学生の読書に関する実態調査・研究」2018年

また、子どもたちは読書を通じて「学びの広がり」や「他者とのつながり」という点で、自分の感じた事や疑問を調べるということに関心が広がったということも見えてきました。

同じように、奈良市でも、今年度の学力調査と読書との関係を調べてみました。確かに「全く読まない」層と「1日30分以上読書をしている」層とを比較すると、小学校の国語・算数のA問題、B問題ともに、1問から2問程度、正答数に差が出てきました。このデータは、相関関係をみているもので、「読書をしたから、各教科の成績が上がったか」という因果関係については、明らかになっていません。



読書と学力の因果関係については、テキサス大学の研究者が、フィリピンのある地域を使って行った研究があります。その結果からは、「読書は国語の成績（単語力や読解力）を上げることと因果関係がある」ということが分かりました。

このことから、読書活動が学力に良い影響を与えていることが明らかになったと考えられます。ただ、立派な図書館を造って蔵書数を増やすことで、子どもの学力が上がるということではないのです。図書館にある資料を子どもがどう読むのか、どう活用するのか、関わる

大人がどのような関わりをしたかということが、後々の効果となって現れるといわれています。子ども達にどのように促し、サポートするかが大きなポイントとなるのです。

先日、県教育サミットが開かれ、「読書と学力」について議論を行いました。その中で、奈良市の特徴的な取組を2つ報告しました。

一つは、公立図書館の司書に学校を訪問してもらっていることです。公立図書館の司書が学校を訪問し、「図書館環境の整備」や「学校図書館利用の指導・ガイダンス」、「読み聞かせ」や「ブックトーク」、「団体貸し出し」などの支援をしてもらっています。このような取組は、学校との連携をうまく取ることができれば、効果的なのだと思います。

もう一つは、学校に入ってもらっている図書ボランティアのことで、学校図書館のボランティアについては、奈良市では、小学校では43校中37校（86%）が、中学校では21校中16校（76%）が、図書ボランティアに支援していただいているという状況があります。



例えば、京西中学校区では、図書ボランティアが総勢30名も登録されていて、六条小学校、伏見南小学校へは毎週火曜日の午前中に5~6人の方が、京西中学校では、ほぼ毎日、昼休みの開館時間にボランティアの方が常駐し、活動されています。

学校にいる司書教諭も含めて、学校がいかにこういった方々とコミットメントしていくかが重要となるのです。

校長は、リーダーシップを発揮して、もう一度、自らの学校図書館について、体制づくりを考えてほしいと思います。子ども達の知的好奇心や興味関心を広げられる環境を整えていくことが大変重要なのです。

読書というのは、気になるところでは立ち止まりながら、考えながら、自分の力で読み進んでいくものです。今入ってくるテレビやインターネットからの情報は、真偽が入り混じったものであり、有益なものだけでなく、まやかしなどが溢れている時代でもあります。そうした情報をしっかり整理し、「数字・ファクト・ロジックを使って、自分の頭で考える」力を身に付ける必要があると思うのです。

### ■数字・ファクト・ロジックを使って自分の頭で考える

今年の前半は、Society5.0やEdTechといったこれからの教育について話をしてきました。「数字・ファクト・ロジックを使って自分の頭で考える」ということは、わかりやすい言葉で表現すれば、「腑に落ちるまで考える」ということです。腑に落ちるまで考え、自分のものにして取り込み、そして、自分の周りにいるステークホルダーに自分の言葉で語ることが、リーダーとして求められる校長の仕事でもあるのです。